

## 「ウィーンの辻音楽師」 (グリルパルツァー)

ウィーンで年に一度催されるブリギッタ祭の日の午後、劇作家の語り手が賑はふ街中を歩いてゐると、老いたる辻音楽師の姿が目にと留まつた。擦切れてはゐるが小奇麗な燕尾服を纏ひ、陶醉した顔に微笑を浮かべ、ぼろぼろの楽譜を見据ゑつつ古びたヴァイオリンを一心に弾いてゐるのだが、何とも調子外れの演奏だつたから、彼の帽子に銅錢を投込む者は一人もゐない。が、やがて夕闇が迫り藝人の書入れ時になると、老人は「すべて物事には潮時が肝心」とラテン語で呟いて雑踏の中に姿を消した。見窄らしいが氣品があり、下手糞な癖にかくも「藝術的熱意」に溢れた「乞食藝人」の姿に語り手は打たれ、後を追つて聲をかけ、稼ぎ時に歸つて了ふのかと訊ねると、老人はかう答へた。自分は午前中は客の趣味や心を淨める爲の稽古に當て、晝間は生計の爲に辻に立ち、晩は神様に祈り獨りで演奏を楽しむ時間としてゐるのです。數日後、語り手は郊外の老人の住ひを訪れる。貧しい百姓家の屋根裏部屋を三人で借りてゐる。

だが、彼の使ふ窓際の一隅だけは清潔にしてあつて、窓枠に花の鉢が並べてあつた。老人の名はヤーコプと云ひ、裕福な宮中顧問官の次男だつたが、餘りに不器用でお人好しな爲に父親に疎まれ、家を出されて一人暮しをしてゐた或日、パン屋の娘バルバラの口遊む歌に魅せられ、それをヴァイオリンで弾きたいと思ひ、稽古に勵み、「神の賜物」たる音楽、「永遠の慈しみと恵みを帯びた音と響」の虜となるが、腕はさつぱり上がらなかつた。

その裡に父が急死し、兄弟も死に、彼が遺産を相續するが、バルバラがお人好しの彼を危ぶみ警告したにも拘らず、騙されて遺産を殆ど無くして了ふ。いつしかバルバラを戀する様になつたが、彼女は肉屋に嫁いで去つて行く。ヤーコプは落魄するが、残つた金で音楽を學び辻に立つてゐると、近くに戻つたバルバラから子供達に音楽を教へてくれと頼まれ、今は安らかに暮してゐるといふのである。

翌春、大洪水がウィーンの郊外を襲ひ、多くの死者が出た。語り手が老人の住ひを訪ねてみると、洪水の時、老人は屋根裏の安全な場所にゐたにも拘らず、泣き喚く近所の子供達を助ける爲に下に飛び降り、水に入つて風邪を引いたのが因で死んで了つたと聞かされる。最期の時は、突然寢床に起上り、「遠くから何か美しい音でも聞えてくる」かの様に首を傾げて聞き耳

を立て、「につこり笑つて」仰向けに倒れ、その儘事切れたのだといふ。

オーストリアの劇作家グリンパルツァーの小説である。音楽を愛し、シューベルトの友でもあつた、如何にも彼らしい美しい物語だが、主人公のヤーコプは若き日にバルバラに胸の思ひを打明け、頬に「ほんの軽く」接吻して貰つた日の感激を一生忘れず、「私の生涯の幸福な一日」だと語り手に語り、續けてかう云ふ、「なんだ、たつた一日か」と云はれるかも知れないが、それは違ふ、だつて人間は神様から他にも澤山恵みを頂いてゐますからね。

それにしても何とも報われぬ生涯である。戀する女と結ばれず、乞食同然の境遇となり、愛する音楽に如何に打込んで生來の不器用を克服出来ない。美しい物語を支へるのはいとも殘酷な現實であつた。カフカはほぼ暗記する程この作品を愛したといふが、報われぬ現實の「否定性」の一切を直視して已まぬ彼の目に、ヤーコプの内面の「幸福」はどの様に映じたのであらうか。とまれ、個我を超える傳統的價値の體系を信じるが故の精神の純潔と靜謐は、我が鷗外も逝きし世の日本人の中に見出してゐたが、それを有する人間の美しさに洋の東西の別は無いのかもしれない。

(福田宏年譯、「ウィーンの辻音楽師他一篇」、岩波文庫)